

## 白土わか先生を偲んで

ロバート F. ローズ

長年のあいだ仏教学科で日本仏教の授業を担当されておられました白土わか先生が、二〇一五年十一月二六日にご逝去なされました。九十六歳でした。

白土先生は一九一九年に福島県のいわき市でお生まれになりました。東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に進まれ、そこで国文学を専攻されましたが、日本の古典文学を学ぶにつれて、それらの作品のなかに言及されている仏教について興味を覚え、東京帝国大学の仏教青年会館などで仏教の講義を聴くなどして、仏教について学ばれるようになりました。一九四一年に師範学校を卒業されたあと、戦時中は東京で教師をお勤めになりましたが、終戦まもなく、京都帝国大学の国文学者であった頼原退蔵博士の助言もあって、一九四七年に大谷大学に入学され、山口益先生のもとでインド大乘仏教を学ぶこととなりました。その後、先生は大谷大学初の女性教員として採用されました。一九六五年の十月からは、二年間パリに留学され、フランスの仏教学・インド学・東洋学の伝統に直接触れる機会を得られました。この時の体験談や当時のフランスの学問状況については、『佛教学セミナー』七号の海外学界ニューズ（「フランス仏教学、日本学についての雑感」）のなかで興味深い報告がなされていますので、ご参照いただければと思います。帰国後は大谷大学短期大学部・文学部で多くの学生の指導に尽力され、一九八五年に定年退職

されてからも、長いあいだ大学で授業を持たれておりました。

白土先生の仏教学は、山口先生のもとで学ばれた文献学的方法論と若い時に培われた日本文学の幅広い知見を見事に融合させている点に、その特徴があるように思います。先生の著書や論文を読み直してみますと、ユニークなものが多く、どれをとつても新鮮で刺激的なものばかりです。

先生が最初に取り組まれた研究は、鳩摩羅什訳の經典論書（特に法華經）に見られる「実相」の原語に関するものでした。鳩摩羅什訳の經典論書は、中国や日本をはじめ、東アジアの文化全般に大きな影響を与えたことは周知の通りですが、鳩摩羅什の重要な訳語である実相に注目されたのは、山口先生の下でインド大乘仏教を学ばれた白土先生ならではの着想であつたように思います。その成果は、『大谷学報』に発表された二つの論文（『実相』訳語考―鳩摩羅什を中心に、『大谷学報』三七（三）、一九五七と『法華經方便品における実相の問題』、『大谷学報』四一（二）、一九六一）にまとめられています。これらの論文で白土先生は、鳩摩羅什訳の經典論書のなかから「実相」の語を拾い出し、その元の言葉をサンスクリット語やチベット語の原典と照らし合わせるという方法を取られております。その結果、実相は *tatvāsya-jaksana* や *bhūta-saṃjñā* の訳語として使用されていることもありますが、多くの場合、実相に当たる言葉は原典には見られず、鳩摩羅什が原典の諸概念を意識して実相と表現したことを明らかにされました。

その後、先生は天台思想の研究に没頭されるようになりました。特に天台の戒律については深い関心を持たれ、最澄の天台菩薩戒思想の基礎にある『梵網經』に関してはいくつもの優れた研究を発表されました。その集大成として書かれたのが、一九六九に『大谷大学研究年報』二十二号に掲載された『梵網經研究序説』という長編の論文でした。この論文は『梵網經』の基礎研究ともいえるべきもので、その成立や注釈書、あるいは『梵網經』と深い関連がある諸經典について詳しく論じられています。

また先生は、京都左京区一乗寺にある天台門跡寺院の曼殊院の経蔵から『出家作法』と題された女人の出家に関する

る文献を発見され、それを『仏教学セミナー』（二十一号、一九七五）に翻刻されています。この『出家作法』は尼僧の出家儀式について具体的に記した興味深い文献ですが、先生はそれを良忍（二〇七二—一三三三）が、高貴な女性の出家の際に著した書物であると推定されています。良忍は融通念仏宗の開祖とされる天台僧ですが、天台宗の戒律の相伝のなかでも重要な位置を占めています。しかし、その著作は極めて少なく、『出家作法』の発見は良忍の仏教について知るうえで、重要な意味を持っています。また『出家作法』の影印本は一九八〇に『出家作法―曼殊院藏』として臨川書店から出版されましたが、それには白土先生の詳しい解説が付記されています。

さらに白土先生のユニークな業績として、辟支仏に関する一連の研究を挙げることができます。辟支仏とは独りで悟る仏教修行者を示しますが、一般的には無師独悟で他のために説法は行わない修行者、または「飛華落葉」を觀て無常を悟る修行者と理解されています。先生はすでに一九八四年に、「飛華落葉」という概念について詳しく紹介した「飛華落葉を觀じて悟るもの」を『佛教学セミナー』の三九号に執筆されましたが、辟支仏研究に本格的に着手する機縁になったのが、智証大師円珍（八一四—八九二）の『辟支仏義集』（二卷）を取り上げた「智証大師円珍の『辟支仏』觀について」（『天台学報』三三三号、一九九〇年）であったように思われます。『辟支仏義集』は円珍が七十三歳のときに著した書物で、そのなかには經典論書のなかから辟支仏に関する記述が多く抜き書きされています。しかし先生が注目されたのは『辟支仏義集』に見られる引文ではなく、その序文のなかで円珍が激しい口調で辟支仏が大乗に廻向し、大乘菩薩道を修すべきであることを述べている点でした。白土先生は『辟支仏義集』の序文の言葉によって、当時すでに日本には無師独悟を理想とし、山林の自然のなかで辟支仏的修行を行っている仏教者が実際に存在し、そのような修行者が円珍の批判の対象になっていたのではないかと推測されました。日光山を開いた勝道が無師智を授かったという記述や、役行者が「独覺の菩薩」と称されていること（ただし、後者は時代が下って、江戸時代に著された修験道関係の『修練秘要義』に見られる表現です）などは、山岳修行者が辟支仏と見なされていたことを

暗示するものであると、先生は指摘されています。これは極めて示唆に富む見解であると思います。この論文を執筆された後も、先生はいくつかの辟支仏関係の論文を発表され、それらのなかで辟支仏がインド・中国・日本などで、どのように理解されてきたかを詳しく論じています。

最後に白土先生には仏教と日本文学の関係を考察した論文も多くあり、仏教典籍の研究と共に、先生のもう一つの主要な研究テーマであったことを挙げておかなければなりません。そのなかには「狂言綺語」の思想を詳しく跡付けた「狂言綺語について」（『佛教学セミナー』九号、一九六九）や、『往生要集』が日本文学に与えた影響を考察した「往生要集と日本文学―平安文学を中心として」（『往生要集研究会編、『往生要集研究』永田文昌堂、一九八七）などがあります。さらに二〇一二年には京都光華女子大学の加治洋一先生が編集された『白土わか講義集―日本の仏教と文学』が大蔵出版から出版されています。この講義集には、白土先生が金沢大学で行われた集中講義や、その他の場所で折に触れて行なわれた講演などが十一編収録されています。これらの講義・講演からは先生の仏教と日本文学に対する幅広い知識のみならず、仏教研究に対する強い熱意がとて強く伝わってきます。

私は大学院生のころ白土先生の講義に出席する貴重な機会を得ることができました。そのころ先生は、天台密教を集大成した五大院安然（八四一？―九一五？）の『真言宗教時義』や、明導照源（一一九八―一三六八）・実導仁空（一一三〇―一三三八）などによって編纂された天台の論議書である『盧談』を授業で取り上げられていました。大学院の授業であったため、毎回の出席者はわずか四、五名でしたが、先生はいつも膨大な講義ノートを作成され、それを使って厳格な姿勢で丁寧な講義を行ってくださいました。仏教研究に対する白土先生の真摯で真剣な態度は、私たちが大切に引きつけていかなければならないと切実に思う次第です。